

# 自由意志論は道徳的責任に必要な自由を問うているのか

西澤 徹臣 (Nishizawa Tetsuomi)

大阪公立大学

自由意志論において問われる自由意志とは、道徳的責任に必要な自由のことであるとされている。人に道徳的責任を負わせるためにはその行為が自由意志にもとづいていることが必要なはずであり、もしそこに自由意志が認められないならば道徳的責任を問うことは不合理であるように思われるのである。そうした見解においては、自由意志論は社会的実践において不可欠と思われる道徳的責任の可否にかかわる問題であるからこそ、真剣な探究に値するのだということが示唆される傾向にある。たとえば、次のような説明がある。

自由意志は道徳的責任に必要なものであるとほとんどの哲学者によって考えられているため、自由意志の懐疑論は道徳的責任についての懐疑論、すなわちいかなることに対しても人は道徳的に責任がないのだ、という見解をしばしば導く。したがって自由意志問題は、たとえそれが厄介なものでないとしても少なくとも常識に反するものであるだけでなく、いくつかの宗教理論および道徳理論の基本的信条に反する結果をもたらすのである。(Campbell 2011, Chapter 1, Section 1.5)

このような説明における一つの中心的な考えは、「自由意志は道徳的責任の必要条件である」ということだと思われる。この考えを前提とすることで、もし自由意志が不可能であれば道徳的責任も不可能であり、さらに道徳的責任が不可能であるならばわれわれの常識や道徳的観念も脅かされるということになる。そして結果的に、自由意志を問うことは社会生活に関わる一定の実践上の意義がある、という見解に至るのである。

しかし、自由意志は道徳的責任に必要なものであるということはそれほど自明なことだろうか。少なくとも現代の自由意志論を見る限り、そのような見解を必ずしも支持しない考え方が散見されるように思われる。つまり上記の Campbell の解説に反して、ほとんどの哲学者がそれを肯定しているとまで言える状況ではないように思われるのである。

本発表では以下の二点を目的としたい。一つ目は、「自由意志は道徳的責任の必要条件なのか」という問いに焦点を当て、現代の自由意志論争において明確にそれを否定するか、あるいは支持していないと考えられるいくつかの立場を確認することである。このような立場は一見したところ、たとえば Fischer の準両立論のような決定論と道徳的責任の両立性を主張する立場と親和性が高い。両立論的議論においては、他選択可能性としての自由意志を認めなくとも道徳的責任は成立することが主張されうるからである。しかし本発表においては両立論だけでなく、リパタリアニズムやその他の立場においても自由意志が道徳的責任の必要条件であることに否定的な見解を持つ立場が見られることを確認したい。

そして二つ目は、一つ目で示すような立場を踏襲するならば、自由意志や道徳的責任に関する考察はいくつかの問いへと再編されるはずであるということを提案したい。自由意志が道徳的責任の必要条件ではないと考える立場においては、自由意志自体を道徳的責任との関わりで定義づけることはもはや難しいだろう。また、自由意志論の意義を道徳的責任の基礎付けに求めるといふ動機も弱いものになるはずである。

したがって、本発表は自由意志と道徳的責任の関係の本性について直接的に検討するものではない。あくまで、現代の自由意志論争の中にはその関係について否定的な見解をとる立場があり、その場合にはいくつかの問いが自覚的に問われなければならないということを提案する発表として行うものである。

#### 【参考文献】

Campbell, J. K. (2011), *Free Will*, Polity Press

Fischer, J. M. and Ravizza, M. (1998) *Responsibility and Control: A Theory of Moral Responsibility*. Cambridge: Cambridge University Press.